



気づけば、史有為先生が日本を離れ中国に戻って、既に10年近くの月日が流れていた。しかし、先生と過ごした日々の思い出は昨日のことのように目に浮かび、頭から消えない。2003年桜が正に満開を迎えた春、私はドキドキしながら明海大学1608号の史有為先生の研究室の扉を叩いた。この時から、先生と私の一生涯にわたる師弟関係が始まった。私が对外漢語教育という分野に足を踏み入れたのも

先生の影響だ。先生の仕事に対する熱意と愛情が、私にこの对外漢語教師というやりがいのある仕事に対し強い情熱を抱かせ、更に異国に身を置き中国語を教えるという使命感と責任感を感じさせたのだ。

私は先生との最初の出会いを永遠に忘ることができない。言語学について全くの素人であった私が、先生に博士課程の後期に進みたいと伝えた際、先生は一切反対することもなく微笑み、「朱徳熙先生の『語法講義』と『馬氏文通』を読んでから、また来なさい」と言った。私はなんてラッキーなのだと思いながら、「本当にこの2冊の中国語で書かれた本を読むだけでいいのですか!」と言った。今、思い返せば、自分自身、本当にまるで何も知らない小さな子供のようだったと思う。2冊の本を実際に手に取り、目次を開いた瞬間、当時のあの喜びは完全に消え去り、えも言われぬプレッシャーで言葉を失った。でも、第一関門で挫ける訳にはいかないと思い、必至に本を読み終え、再び先生の研究室の扉を叩いた。先生はやはり最初と同じように微笑んで、「2冊とも読み終りましたか?」と言った。私は自信なく、「読み終りました」と答え、「では、感想を言ってごらん」という先生の言葉を待っていた。が、期待に反し、先生は私に「言語と文化」をテーマに小論文を書くように言った。私は呆然と先生の話を聞き終わると、この先生はなぜこんなにあっさりと「私を見逃してくれたの?」と思いながら、自分の研究室に戻った。まさか2つのテーマが当時の私にとってそんなに容易いものではないことも知らずに、自分の経験を基に論文を書き終え提出した後、心の中で、これでやっと一息つける!とホッとした。すると、すぐに3つのテーマが出された。2年生の中国語教材の理解度を調査しなさい!1ヶ月間の統計と聞き取りが終わって報告書を提出した後、先生はゆっくりと少し頷きながら、「10月の試験に向けて準備をしなさい!」と言った。こうして筆記試験と面接を経て、私はついに先生の門下生となった。感謝の気持ちを胸に先生の元を訪れた私に、先生はまた1ヶ月間に読むべき本のリストを渡し、本を読み要旨をまとめるという作業が私の日課となつた。新学期の最初の日、先生は厳粛な面持ちで、「君はまだ第一関門を通過したに過ぎない。物事には必ず始めと終わりがなければならない。心を決めたからには、途中で諦めることなく、博士課程後期の最後までやり抜くように。」と言った。私も身が引き締まる思いで先生に、必ず最後までやり遂げます!と約束した。まさか先生のこの期待が、私にとって、その後の学問という困難な旅路を照らしてくれる一筋の灯りとなり、博士号を手にするまでずっと道を照らし続けてくれるとは思ってもみなかつた。それまでの様々な試験もみな、私に学業の基礎を固めさせるためだったのだ。先生は私や他の学生に対し、道理や説教で諭すようなことはせず、常



## 満開の桜に恩師を想う

に彼特有の「暗黙のプレッシャー」により、私たちにレベルアップを求める。先生の門下の院生は全学科の中でも最も多数を占めていた。なぜなら、先生は一人ひとりの生徒に応じた教え方で、「暗黙のプレッシャー」の下、私たち对外漢語教育の入り口で彷徨う学生を迎える、様々な方法を用いて各学生の潜在能力を引き出し、学生たちが自分に合った職場で活躍するところまで導いてくれるからだ。

1年の夏休みが過ぎた頃、学長から、先生は体調が思わしくなく、しばらく休むことになるだろうという話を聞いた。多くの学生が先生のことをとても心配していた。私はというと、「先生が休みの間、しばらく休講になるかな?」と、内心ちょっと喜んでもいた。しかし、いつになんでも史有為先生の休講の通知はなく、授業の時間がやって来た。すると、先生は以前と全く変わらぬ様子で先に教室に座り、一人ひとりの学生に笑顔で軽く声をかけた。私は何だか腑に落ちず、「先生、体調が悪かったのではないか?」と全然そうは見えないけど。学長の話は間違えだったのかな?などと考えていた。

柳 宇星

天地寂然不動、而氣機無息少停。日月昼夜奔馳、而貞明万古不易。故君子、閒時要有喫緊的心思、忙處要有悠閒的趣味。

天地は寂然として動かずして、而も氣機は息むことなく、停まること少なり。月は昼夜に奔馳して、而も貞明は万古に易らず。故に君子は、閒時に喫緊の心思うるを要し、忙處に悠閒の趣味あるを要す。

天地はひっそりとして動かないように見えるが、動きを止めることはなく、太陽や月の明るさは永遠に変らない。だから人の上に立つ者は、暇な時こそ張詰め、忙しい時こそゆったりとした心構えが必要である。

つまり、小人は閑居すれば不善を成すが、大人は閑居しても成果を成すということ。

菜根「壇」(八)

## 社長のブログ

私はまるで深い谷底に突き落とされたかのような気持ちだった。その時、私を救ってくれたのは、「十年一劍を磨く、一度始めたことは必ずやり遂げなければならない」という先生のメールだった。この言葉があったからこそ、私は最後の最後まで諦めず、今こうして博士号を手にしているのだ。先生は私が岐路に立った時、常に路を照らし導いてくれた。最後の年、博士論文の提出で私は焦り苛立っていた。そんな私の様子に先生もやきもきしていた。私がプレッシャーに押し潰されるのではなく心配した先生は、私の学校の先輩や後輩に電話し、どのように私を諭し、この難關を乗り越えさせるかを彼らに伝え、託した。論文を無事提出し、面接を通過した後、私はその嬉しい知らせを先生に伝えた。涙で全く声にならなかった。先生もまた、電話の向うで言葉では表現できないほど感激し、喜んでいた。学生のことを思い、教壇を愛した先生、先生の真心は私たち一人ひとりの学生の心を動かした。親しみやすく、博学で、一人ひとりの学生の気持ちを察し、それぞれの学生に応じた教育を施す教育者であった先生。先生は私たちに「師とは、導き、学問を授け、迷いを解く者である」という言葉の真意を教え、「師」としての手本、「師」としてのあるべき徳行を示してくれた。

先生の伯樂のように人の能力を見極める力に感謝し、人に厳しく己に厳しく教育に向き合う姿勢に感服し、豊富な知識に深く感銘を受けた。先生のような見識のあるすばらしい恩師との出会いがあったからこそ、自信を失った時もすぐに投げ出ことなくここまでやってこられた。先生がいて下さったからこそ、私たちは自分の長所に気づき、一日に千里の道を走る能力の秀でた「千里馬」に成長することができた。この度、80歳の誕生祝いという機会をお借りし、恩師の長年に亘る熱心な指導に心から感謝の意を表したい。これからもずっとお幸せに、お健やかにいられるよう心から祈つてやまない。

私も、いつもその型を意識していました。ただ、形を意識するだけ、気持ちはまったく伴つていなかつたのです。心ここにあらずで、ペコペコ頭を下げる姿を捉えて、先輩はコメツキバッタと揶揄したのでしょう。

挨拶に限らず、礼儀作法は、相手や場所への敬意を形示すものです。形と心が一致した挨拶は、受け手だけではなく、周囲をも清々しくさせます。

指摘してくれた先輩に、「ありがとうございます」と心に思ひながら、私は深く頭を下げました。

鹿を追う者は山を見ず」という格言のように、目先の獲物ばかりに目を奪われていると、山全体、いわゆる大局が見えなくなっています。日々の業務に追われる生活も、こうした状況に近いでしまう。人生には節目があります。時には過去の節目を思い起こし、人生を大局的な視点で眺めて、今の自分を再点検してみましょう。

私も、いつもその型を意識していました。ただ、形を意識するだけ、気持ちはまったく伴つていなかつたのです。心ここにあらずで、ペコペコ頭を下げる姿を捉えて、先輩はコメツキバッタと揶揄したのでしょう。挨拶に限らず、礼儀作法は、相手や場所への敬意を形示すものです。形と心が一致した挨拶は、受け手だけではなく、周囲をも清々しくさせます。

挨拶してくれた先輩に、「ありがとうございます」と心に思ひながら、私は深く頭を下げました。

私も、いつもその型を意識していました。ただ、形を

意識するだけ、気持ちはまったく伴つていなかつたのです。心ここにあらずで、ペコペコ頭を下げる姿を捉えて、先輩はコメツキバッタと揶揄したのでしょう。

挨拶に限らず、礼儀作法は、相手や場所への敬意を形

示すものです。形と心が一致した挨拶は、受け手だけ

ではなく、周囲をも清々しくさせます。

挨拶してくれた先輩に、「ありがとうございます」と心に思ひながら、私は深く頭を下げました。

私も、いつもその型を意識していました。ただ、形を

意識するだけ、気持ちはまったく伴つていなかつたのです。心ここにあらずで、ペコペコ頭を下げる姿を捉えて、先輩はコメツキバッタと揶揄したのでしょう。

挨拶に限らず、礼